

第1章 尾張横須賀の歴史

1 概況

江戸初期、寛文6年(1666)尾張藩二代藩主「徳川光友」が馬走瀬(まはせ)と呼ばれた寒村(現在の横須賀町及び高横須賀町の一部)に横須賀御殿を建て、この地を訪れたことから横須賀町は町方と称され、それまで静かだった横須賀の漁村は家が建ち並び大変な繁栄を見せ、商業の町へと変貌しました。

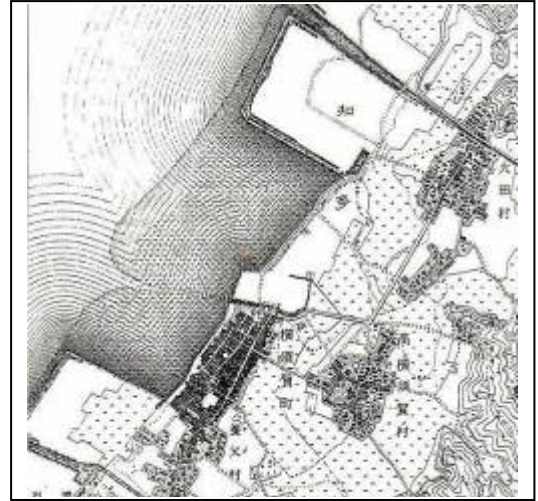
当時は海が間近に迫り、綺麗な海岸線が望めたため「臨江亭(りんこうてい)」と呼ばれていました。光友の死後この壮大な別荘は取り壊されたが、天明3年(1783)、知多西浦73カ村の行政の中心となる尾張藩の代官所が跡地に建てられました。このことを記した石碑が東海市勤労センターの東側にあります。

横須賀御殿が作られた後、横須賀は名古屋や犬山と同じような城下町としての扱いを受けるようになりました。以降、知多の政治・経済・文化の中心地となり、近くの村で醸造された酒の積み出しや知多木綿が伊勢に積み出されるなど、海運でも繁栄を見ました。

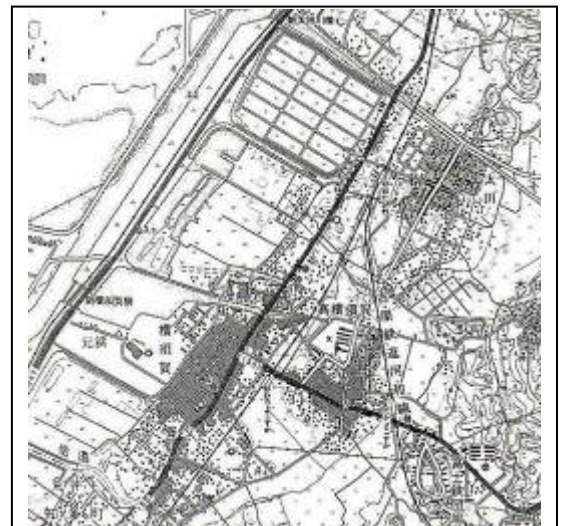
明治以降も横須賀は引き続き発展を遂げ、知多半島北西部の代表的商業地区として多くの商店・銀行が開設されるとともに、道路や鉄道の開通、尋常小学校の設置など近代化が進み、18ヶ所の村及び新田からなっていた現在の東海市は、その後多くの村を統合して明治15年には7つの村になり、明治22年に横須賀村は横須賀町となりました。

横須賀は大正年間から昭和初期にかけて警察署や旧制高等女学校などが置かれ、西知多の政治経済の中心地となっていきました。

昭和に入ると豊田製鋼(現:愛知製鋼)がこの地にはじめて製鉄所を造り、さらに昭和35年に名古屋南部臨海工業地帯の造成工事が開始され、昭和39年には東海製鐵(現:新日鐵住金)が操業を始めました。このため海苔の一大生産地であった遠浅の海岸部は工業用地造成のために埋め立てられ、漁業の歴史に終止符を打つことになりました。以後、のどかな農漁村は一変し、人口の急増により昭和44年上野町と横須賀町が合併し現在の東海市となりました。



■明治24年(出典:東海都市地図)

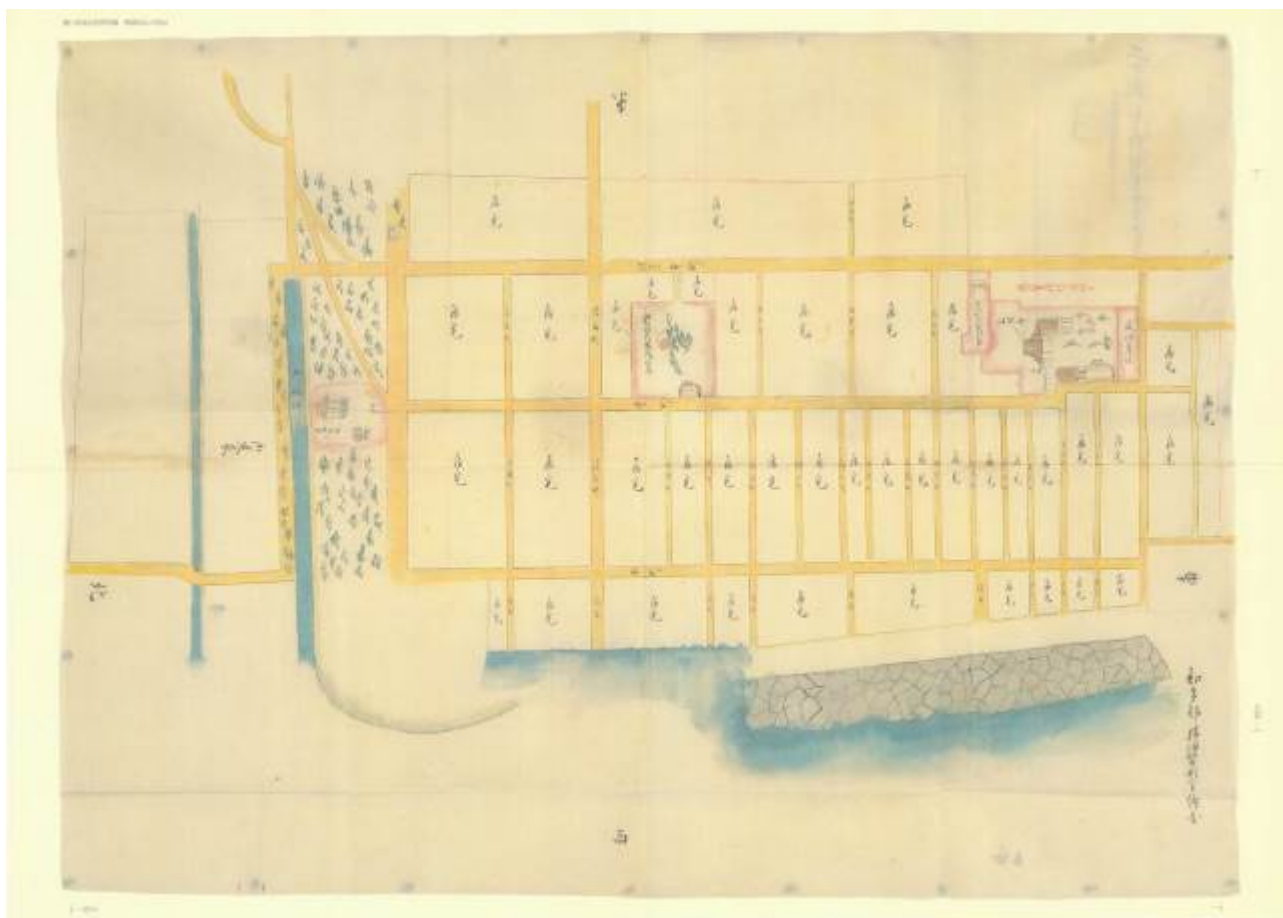


■昭和43年(出典:東海都市地図)



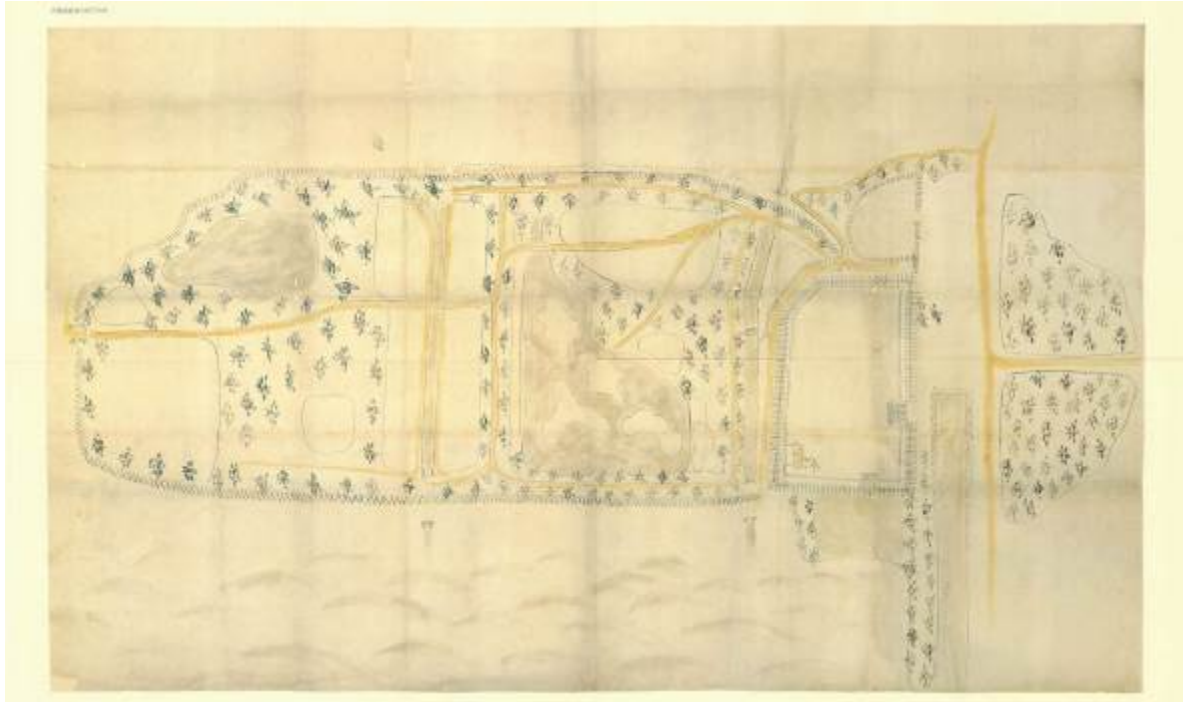
■町村合併図

■横須賀町方絵図(江戸期) 出典:東海市史資料編別巻



- 馬走瀬（まはせ）と呼ぶ貧しい集落だったが、横須賀御殿の造営とともに町方と呼ばれて繁盛した。
- 地元で本町筋と呼ぶ現国道 155 号付近は、往還本町と書かれており、明治の終わりころまで昔ながらの紺屋、木綿問屋、知多酒の蔵元、旅籠屋、料亭などが並び、大店の店先には屋号を記した石油ランプの門灯がさげられた。
- 石垣は地先が埋め立てられて現元浜となるまでは、夏には子どもたちの遊び場となり、カニやエビ、小魚を捕ったり、秋にはハゼ釣り場として、近郷の人たちや子どもが釣ざおを並べた。
- 元浜町は昔は遠浅の海岸だったが、昭和 28 年から 5 年をかけて埋立が行われた。
- 絵図の南端、玉林寺の隣にかけて愛宕神社が所在したことを示す文字が記されている。
- 修験大教院境内と松が描かれているが、この松は「琴弾松」と呼ばれ、地を這うように枝を四方に延ばし、千年近い樹齢で県の天然記念物にも指定されていた。

■横須賀御殿絵図(江戸期) 出典:東海市史資料編別巻



■横須賀御殿配置図(江戸期) 出典:横須賀御殿のあらまし



- 南端に二つの半円形で描かれている小松原は、今の愛宕神社境内地で、当時は玉林寺の隣にあったものを、横須賀御殿の取り壊し後にこの地に移された。
- 小松原の北に横須賀入江がみられ、その北に立派な門が描かれ、矢来で囲まれた一角に横須賀御殿の建物があった。
- 横須賀御殿は臨江亭と御洲濱で構成されており、御洲濱は150間(約296m)四方の広さを持つ回遊式庭園であり、自然の一部となす和風庭園であった。
- 御殿廃止後、天明3年(1783)に跡地に横須賀代官役所が設置され、明治維新で「南部総官所」となった。
- 現在、当地には市消防署、東海警察署、東海南郵便局などの施設のほか、勤労センターが設置されている。

■横須賀町鳥瞰図(S11) 出典:東海市史資料編別巻



【昭和 11 年 5 月発行の小冊子掲載の鳥瞰図】

- 当時の横須賀港は伊勢湾の主要な港で、煙突を備えた大きな商船も描かれている。
- 港の北端から横須賀の本川入江となり、多くの船が寄港した。
- 昭和 37 年ころまでは海水浴やハゼ釣りなどが楽しめた。
- 愛知県の天然記念物に指定されていた「琴弾松」も描かれているが樹齢が尽き枯れてしまった。
- 横須賀駅近くに警察署があったが移設された。
- 町役場も昭和 15 年 1 月に尾張横須賀駅北西に移転し、その後焼失した。新築された庁舎は昭和 44 年の市政施行後に市役所南庁舎となり、現在は昭和 55 年に新築された文化センターがある。
- 絵図中央付近の女学校は戦後新制中学校の校舎として一時使用されたが、建物は取り壊され現在は横須賀小学校の敷地の一角となっている。
- 葉煙草収納所、トマトの製造工場、歌舞伎座、牡丹園、タイル工場などの商工業施設もみられる。

2 地区の生い立ち（まちの姿の変遷）

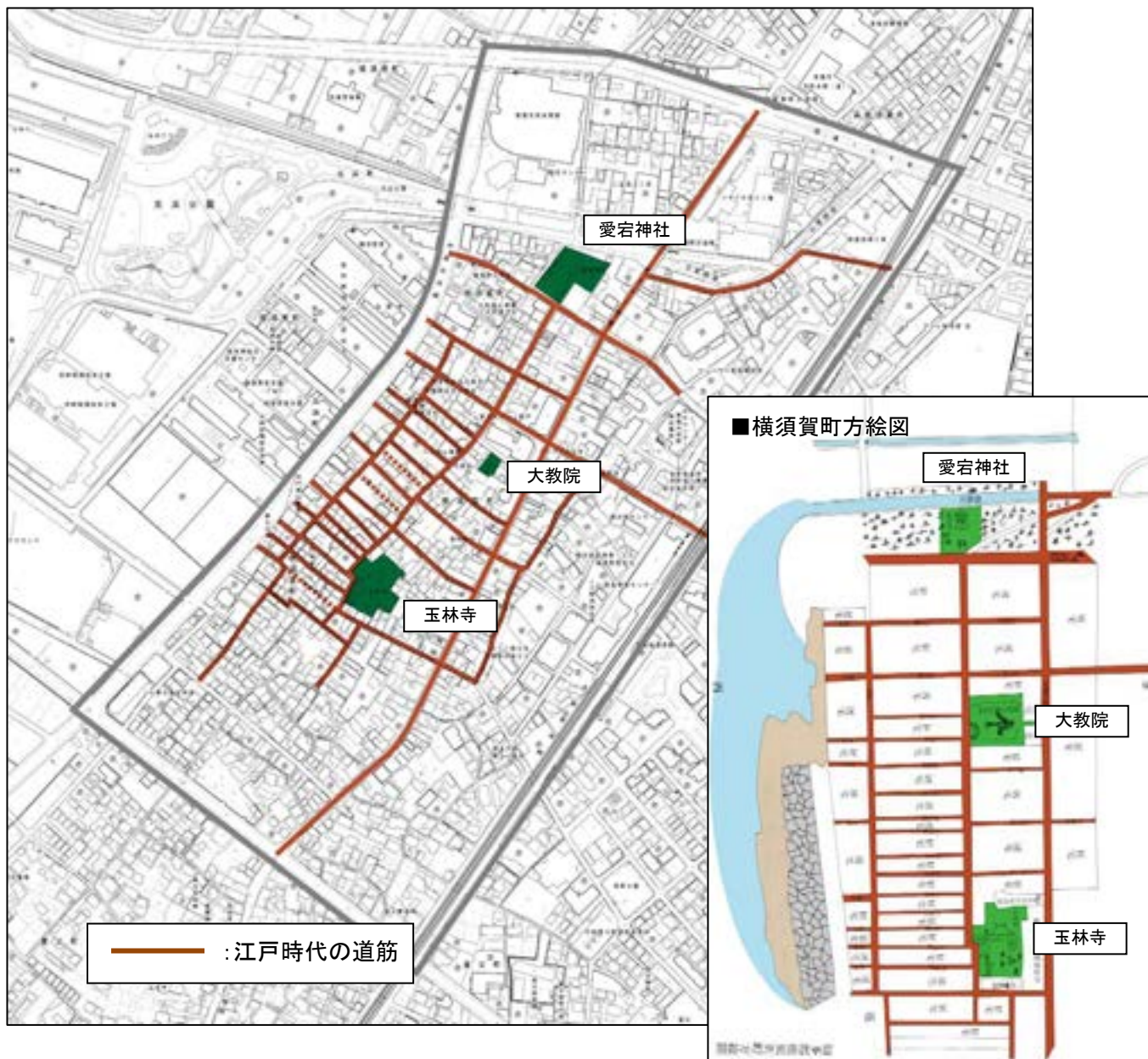
【江戸期】

- 1666年 二代尾張藩主徳川光友が横須賀御殿を造営
 - ・臨江亭（殿舎、数寄屋などの遊興施設）と御洲浜（回遊式庭園） ※御洲浜の池は現存
 - ・馬走瀬（寒村集落）⇒御殿造営により横須賀町方へ改名（1675年）⇒以降、城下町としての扱いを受け繁栄
- 1700年 光友の死去とともに御殿取壊し
- 1742年 愛宕神社、玉林寺から、現在地（扇島の松林）へ移座
- 1783年 御殿跡に横須賀代官所設置（名和村～現南知多町までの知多西浦75村を管轄）
⇒行政の中心地として人口急増
⇒常滑街道や港を背景に、商業地としても飛躍的に発展
⇒このころ、横須賀まつり（山車まつり）がはじまる



往時の町割り・祭りがそのままの姿で継承されている

■江戸時代の町割りと現在の市街地との対比



【明治～大正～昭和期（戦前）】

<行政変遷>

- 横須賀町方⇒明治11年横須賀村⇒明治22年横須賀町（役場設置）⇒明治39年大田村、加木屋村、高横須賀村、養父村と合併し横須賀町となる

小区	戸数	村名	明9	明11.12.28	明22.10.1	明39.5.1
10	17	名和村	名和村	名和村	明22	
		浅山新田				
		名和前新田				
9	28		(南榮田新田)			
10	18	加家村	荒尾村			明39.9.15 上野村
		中村				
		波内村				
		平嶋村				
10	19	富田村	富木島村			
		本延村				
9	20	加木屋村	加木屋村			横須賀町
		横須賀町方				
		横須賀村				
21		藍洞村	藍洞村	高横須賀村		
		養父村				

- ・江戸期から明治期にかけ発達した常滑街道（本町筋を通る）、横須賀港が横須賀町方（横須賀村）の発展要素
- ・本町筋には、紺屋、木綿問屋、知多酒の蔵元、旅籠屋、料亭が建ち並ぶ
- ・石油ランプの門灯（「ランプに灯を入れて回る法被姿の若衆には一種のロマンが漂い、町方ならではの風物詩」：市史資料編別巻）
- ・横須賀は知多半島北西部の商業の中心地として活発な経済活動が展開されており、明治期より衣浦銀行、尾張銀行、中埜銀行（東海銀行）など名古屋及び知多半島地域に本店を持つ銀行が進出

●1912年（明治45、大正1） 名鉄常滑線開通、尾張横須賀駅開設

●1932年（明治7） 養父漁業組合落成

⇒横須賀港との間に多くの船が出入りし、伊勢湾の魚が盛んに水揚げ、多くの魚問屋
横須賀港の北端から横須賀の本川入江となり、ここにも多くの船が寄港

●1936年（昭和11） 扇島地区埋立て完了

●時期不明 横須賀駅近くの警察署⇒太田川駅西南へ移転

●1940年（昭和15） 町役場尾張横須賀駅北西（現文化センター位置）へ移転

⇒昭和29年 焼失

⇒昭和31年 現在位置で新築

⇒昭和44年 市制施行にあわせ市役所南庁舎となる

⇒昭和55年 文化センター開館



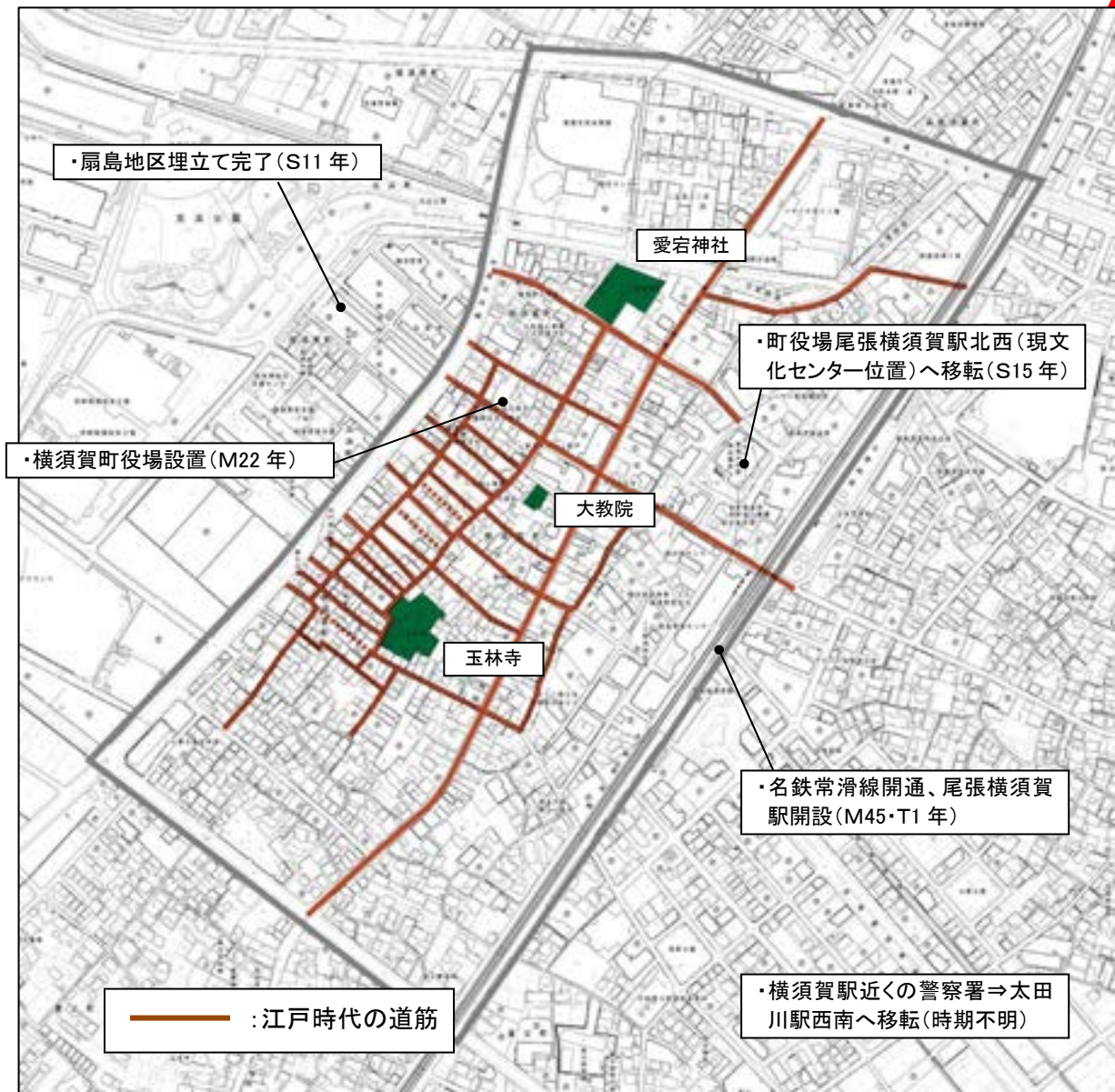
江戸期とまちの広がりには大きな変化がないなかで、町方はさらに繁栄

横須賀町方が東海市(旧横須賀町)の起源

■大正期のまちの姿(大正9年)



■明治～大正～昭和期(戦前)のまちの姿の変遷



【昭和期（戦後）】

- 1953年（昭和28） 元浜一帯の埋立て着工
- 1958年（昭和33） 元浜地区埋立て完了
横須賀センター開店（東海市最初の大型小売店、専用バスを運行し本市及び知多市域からも集客）
- 1960年（昭和35～36） 東海製鉄（現新日鐵住金株）、その南に大同製鋼（現大同特殊鋼株）知多工場建設着手
- 1961年（昭和37） 横須賀電報電話局開局
- 1974年（昭和49） 東海産業医療団横須賀病院（旧横須賀大同病院昭和20年開院）を東海市民病院として開院（～昭和59年中ノ池新病院完成）
- 1979年（昭和54） 尾張横須賀駅西第1市街地再開発事業施行（0.67ha）
- 1982年（昭和57） 勤労センター開館、駅西再開発ビル竣工
- 1988年（昭和63） 市民体育館開館、元浜公園都市計画決定（～平成8年順次供用開始）
- 1989年（平成1） 公家緑道工事着工（平成2～平成7年順次供用開始）
- 1998年（平成10） 横須賀本町市街地再開発事業施行（0.25ha）



横須賀町方を取り巻くまちの姿が大きく変貌～繁栄から活性化が課題となる～

横須賀町方では連綿と江戸期の町割り、歴史文化が継承される

■昭和期（戦後）のまちの姿（昭和51年）



■昭和期(戦後)のまちの姿の変遷

